

長いこと日本人男性は、企業・職場戦士として「仕事の虫」と言われてきた。

それだけに子供との対話風景は、週末や休暇の時間くらいにしか見られない。

一方、主婦は子どもの世話は勿論のこと、家事から家庭教育に至る一切を天職のようにしてきた。子供が幼稚園か小学校に入って、少しアルバイトが出来るように暮らしが変化しても、「教育ママ」として家庭での責任は依然変わらないのである。

3・11 大震災は、子供の授業中と親の勤務時間中に発生。不幸にも数多くの母子家庭が生まれ、同時に「父子家庭」が生まれた。

父子家庭は、母子家庭以上の難題を父親らに突きつけている。これまで仕事一途だったお父さんたちは被災を境に、子育てをしなければならなくなった。不慣れな子供の食事づくりや洗濯などに手を焼いている。

しかし、「教育パパ」を全うするため、久々に学校の教科書を読みなおし、これまで子供に注ぎ続けてきた妻の愛情を肩代わりするのに大わらわの日々である。

震災前、肩で風を切って街を歩いていた逞しい男たちの日常が、震災後は一変。仮住まいの「家」に戻るや、家庭「主夫」の務めが待っている。

勤務先で模範社員だった新田貢さんは、これまで息子との会話が少なかった。

川辺伸晃さんは奥さんを失って初めて、妻がかけがえのない母親の役割をしてくれていた大きな存在だったと深く悟った。

奥様の貴さと存在感だ。その姿を偲び、お手本にして、これから子どもと懸命に生きていこうと、感謝を込めて壁高く飾った亡き妻の遺影に誓っている。

屈強で根性ある大和男子とは言え、突然父子家庭になったことはあまりに悲しく辛い。だが、その心境を軽々と他人に吐露できない。

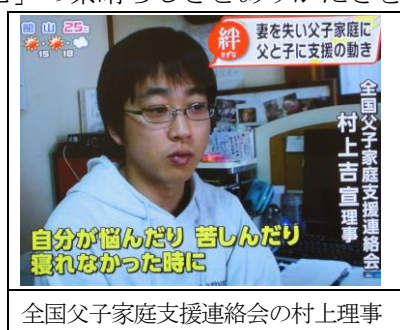
と言って苦しみや悩みを抱えながら耐え続ける姿は、幼い子によくはないばかりか、父親自身の心身にも悪影響を及ぼすに違いない。

こうした状況の中で、同じ父子家庭の村上吉宣さんは、「全国父子家庭支援連絡会」を立上げた。父子家庭の仲間たちのために、コンサルタント活動を展開し始めたのである。同じ境遇に苦しむ父親たちが悩みを打ち明け合う交流の場の提供だ。

ちなみに連絡会を窓口に募金を呼びかけたところ、早くも一部の父子家庭に義捐金が届けられたという。「全国父子家庭支援連絡会」のような団体は、妻亡き後の父子家庭・夫らを結びつける絆の役割を果たしている。

同時に、目頭を熱くさせるこの話を伝えた TBS のテレビの役割と影響力も大きい。

番組のおかげで絆は更に広がり、食卓を囲む一般視聴者をも虜にして、多くの人々が人情味深い「人の心」の素晴らしさとありがたさをかみしめている。



全国父子家庭支援連絡会の村上理事